

おしん

(一) 奉公篇

橋田

おしん

(一) 奉公篇

橋田壽賀子

著者紹介

昭和4年京城で生まれる。日本女子大学国文学科を経て、早稲田大学文学部芸術科卒業。昭和25年松竹脚本部入社、35年退社。以後シナリオ・ライターとして、NHKをはじめ民放各社においてもすぐれたテレビドラマの脚本を執筆、あわせて劇作家としても、数多くの舞台台本を手がけている。その幅広い活躍で、53年度放送文化賞を受賞した。

代表作として、大河ドラマ「おんな太閤記」、銀河テレビ小説「となりシリーズ」、ドラマ人間模様「夫婦」などがある。朝の連続テレビ小説は「あしたこそ」以来二度目である。

NHKテレビ・シナリオ

おしん(一) 奉公篇

定価 一、四〇〇円

昭和五十八年七月二十日 第一刷発行
昭和五十八年八月二十日 第三刷発行

著者 橋田壽賀子

発行者 藤根井和夫

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四一(一)150

電話 〇三―四六四―七三二一

振替 東京一―四九七〇一

編集協力 内館牧子／岡本由紀子

印刷所 凸版印刷 製本所 石津製本

検印廃止

©1983 Sugako Hashida Printed in Japan
ISBN4-14-005110-8 C0393 ¥1400E

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

奉
公
篇

装画 風間 完
装幀 蟹江 征治

目次

序	4
1	7
2	58
3	109
4	160
5	211
6	263
7	315
8	366

本篇に収載のシナリオは、昭和五十八年四月四日より五月二十八日まで放送されたものです。章の数字は、放送開始からの週を表しています。また、文中にある＊印は、日替わりを表します。

序

『五十を過ぎてから、鏡をみると、亡くなった母を思い出すようになった。鏡の中の私は、ちょうど私が母に反抗し、母のもとを去って上京した頃の顔で、私もその頃の母の年になり、その頃の母に似てきたのである。そしてやっとその頃の母の痛みもわかるようになった。しきりに不肖の娘だったと悔いる気持と一緒に、妙に母への懐かしさがつり、母の年齢と似たひとに心惹かれる。

が、今のひとに、この母たちの生きざまや考えかたは、もはや理解出来なくなってしまうている。ものがあふれ、教育ママが当たり前の時代に、米の飯が食べられなかったり、勉強したくても小学校へもやってもみえず、七歳から奉公に出された子供がいたなんて、想像もつかないだろう。なにかも電化され、手抜きして余暇を作ることが文化だと思っているひとたちには、マキで炊事をし、大家族の洗濯も縫いものもつくろいものも、すべてその手でしてきた母たちの苦勞など、わがらうはずもない。でも、今のこの豊かな時代を育ててきたのは、まさしくこの母たちなので、その母たちを知っている最後の世代が私たちなのである。

ときどき母たちが黙々と生きてきた苦勞を、今私が出来るだろうかと思う。洗濯ひとつにしても、私には到底真似出来はしない。その遅しさの中に、豊かさ故に、今私たちが失ってしまった大事なものがたくさんあることに、この年になって気がついた。私が、明治生まれのかたたちの手記を集めたいと思ったのも、私の姑や母だけでなく、ひろく明治、大正、昭和と激動の時代を生き抜いてこられたかた

ちの人生史を知り、そのかたたちの生きざまを通じて、私たちが見失ったものをみつめ直したかったからである。それはまた、日本が明治から昭和へと近代国家に急成長する過程で、そぎおとしてきたものでもある。ダンボール箱一杯になるほどいただいた原稿やお手紙は、やはり、私の姑や母がたどったのと同じような苦勞がしたためられていて涙なしには読めないものばかりであった。

このドラマの女主人公「おしん」は、そうした母たちの象徴である。「温故知新」。ふるきをたずねて新しきを知る、という意味だが、「おしん」という名もない女性の一生を描くことで、今、私たちが生きるための指標を探れたらと願っている。それは、明治生まれの母たちを知っている最後の世代の私たちのつとめだし、母たちへの鎮魂歌なのでもある」

以上は『母たちへの鎮魂歌』と題して「ドラマ・ガイド」の巻頭に載せた拙文であるが、この文に私の『おしん』への思い入れのすべてが込められている。この巻頭言を読まれた多くのかたから、共感のお手紙をいただいた。また、放送をご覧になったり、「ドラマ・ガイド」を読まれたかたから、ぜひシナリオ集を出版してほしいというご要望があいついでいると聞いている。

「シナリオは、本来、活字にするものではない」という教育を、私はライターになる過程で受けてきた。シナリオは裏方の仕事であり、映像になってこそ生きてくる。シナリオを活字にするのは重たいし、私は一生裏方に徹するつもりでいた。しかし、台詞を読んで自分なりのイメージをつくるのは、それなりに意味があるのかもしれない。面白いという人も増えている。出版社からのお勧めもあって、あえてシナリオ集を出版することにしたのである。

● スタッフ

音楽	坂田 晃一
考証	小木 新造
制作	岡本 由紀子
デスク	山岸 康則
演出	江口 浩之
	小林 平八郎
	竹本 稔
美術	田坂 光善
	宮井 市太郎
	増田 哲
技術	設楽 国雄
	白石 健二
効果	水野 春久
	林 幸夫
方言指導	大久保 正信
	芝田 陽子

● キャスト

田倉しん	乙羽 信子
おしん(16歳)	田中 裕子
おしん(6歳)	小林 綾子
祖母・なか	大路 三千緒
父・作造	伊東 四朗
母・ふじ	泉ピン子
遠山俊作	中村 雅俊
松造	大久保 正信
りき	渡辺 富美子
松田先生	三上 寛
軍次	平泉 征
きん	今出川 西紀
つね	丸山 裕子
定次	光石 研

田倉しん	高橋 悦史
田倉道子	浅茅 陽子
崎田辰則	桐原 史雄
崎田稔	吉野 佳子
八代希望	野村 万之丞
八代圭	大橋 吾郎
加賀屋・くに	長岡 輝子
清太郎	石田 太郎
みの	小林 千登勢
加代(16歳)	東てる美
加代(7歳)	志喜屋 文
高倉浩太	渡瀬 恒彦
ナレーター	奈良岡 朋子

1

志摩半島

N——昭和五十八年、春もまだ浅い頃のことである。志摩半島の小都市にある田倉家の祖母おしんが突然家を出た。八十三歳の高齢である。おしんの次男仁は、周辺の町々に十六店のスーパーマーケットを経営し、その日は、十七店目の新店舗を開店するめでたい当日であった。田倉家が今日の隆盛を迎えたのは、ひとえにおしんの苦勞のたまものといえる。そのおしんが、田倉家の発展を象徴する十七店目の開店の日に家を出るなど、家族には信じられないことであった。もちろん、誰ひとり理由に思い当たる者はいなかった。

田倉家（朝）

座敷の床の間には祝いの飾りつけ。神棚にもあかあかと燈明があげられ、玄関にもそれらしい雰

気がある。その中を、式服の家族や使用人たちがあたふたと行きかう。

同・居間

おしんの娘婿辰則（54）が電話をかけている。

辰則（電話に）どうも朝早くからお騒がせいたしました。いえ、ちょっと気になることがあったものですから、おたずねしただけで……。どうかご心配くださいませように……。失礼いたしました」

と、受話器をおく——座敷の真ん中で仁王立ちになつていた仁（54）が辰則を見る。

黙つて辰則に首を振つてみせる仁。またダイヤルを回し始める辰則。仁も辰則も、もちろん、式服に威儀を正している。

仁 「（いらいらと時計を見）そろそろ出かけんと間に合わんぞッ」

辰則 「一時間でも式を延ばすように言いましょうか」

仁 「我々だけじゃない、来賓も大勢招待してるんだ。市長もみえることになってる。そんなみっともないことが出来るかッ」

辰則 「しかし、お義母さんが出席なさらないんじゃあ……」
仁 「おふくろのことだ、時間になつたらひょっこり顔を

見せるさ。そういうひとだよ。大体、みんなが騒ぎ過ぎるんだ。家出と決まったわけでもないのに……。

第一、家出なんぞしなきゃならん理由がどこにあるのかねッ

辰則「ただ、今度の出店には、最初からひどく反対しておられましたから……」

仁「くだらんッ、田倉スーバーをここまで引ッ張ってきたのは、おふくろなんだぞ。それを今になって妙な感傷で……。年をとったよ。おふくろも……」

辰則「じゃ、やっぱり反対なさる理由があったんですか？」

仁「（苦い顔になって）……」

辰則「それがわかれば、家出の理由も……」

仁「話にもなにもならんことだよッ」

不機嫌な仁に、とりつくしもない辰則——いらしている仁。

同・おしんの部屋

これも式服のおしんの娘禎（52）が、おしんの箆（へら）を調べている——そばで仁の妻道子（50）がオ

ロオロして見ている。

道子「なにか、なくなってるものがありますか？」

黙々と方々改めている禎。

道子「私、お姑さんのお部屋へはなるべく入らないようにしていましたし……。箆の中なんか見たこともないから、どんなものをお持ちなのかさっぱり……。こういうときは、やっぱり禎さんじゃないと……」

禎「……」

道子「嫁なんて情けないもんだわ」

禎「（がっかりしたように）やっぱり覚悟の家出ね」

道子「（禎を見つめて）……」

禎「母さんの好きな着物が五枚ほどなくなってるし、帯も二本……。下着類も相当持ち出してるわ。ここにぎっしり詰まっていたんだから……。それに、私がバリへ行ったとき買ってあげたトランクがなくなってる」

道子「だけど、どうしてッ」

禎「可哀そうに……。母さんは愚痴こぼすのが大嫌いなひとだから、なにも話してはくれなかったけど、いろいろ我慢してたのねえ。ひとこと私に言ってくれたら……」

と、涙を抑える——。

ブンとふくれる道子。入り口に人影が立つ——八代圭（20）である。

ハッと振り向く禎。

禎 「なんだ、圭ちゃん」

圭 「おばあちゃんがなくなっちゃって電話があったから

……。親父も心配して」

道子 「希望^{のぞみ}さんも来てくださってるの？」

と、あわてて立つと出てゆく。

圭 「(禎に)置き手紙もないんですか？」

禎 「(うなずくと声をひそめ)道子さんがああいひと

でしょう。とにかく田倉へは自分の実家からずいぶん

お金を注ぎこんだって気持があるから、大きな顔して

るし……。おばあちゃんだって、嫁の実家に世話にな

ったと思えば、言いたいことも言えないしねえ。仁兄

さんは女房に頭が上がりません……。おばあちゃん、

とうとう辛抱しきれなくなっちゃったのよ」

圭 「……」

禎 「ねえ、圭ちゃん、おばあちゃんからなにかきいてな

い？」

圭 「……？」

禎 「圭ちゃんは誰よりもおばあちゃんに可愛がってもら

ってんだから……」

圭 「……いえ」

禎 「あんたのお父さんにはなにか話してるかもしれない

わねえ。おばあちゃんは、ほんとの息子や娘の私たち
より、あんたのお父さんのこと頼りにしてるんだも
の」

と、そそくさ出てゆく——ばんやり突っ立ってお
しんの部屋を見つめている圭。

同・居間

仁、辰則、禎、道子の前で、希望(53)が座って
いる。

希望 「そうですか、じゃ、やっぱり……」

仁 「衣類やトランクがなくなったからって、家出とは限

らんだろう」

道子 「そうですよ、ちょっとその辺へ旅行にでも……」

辰則 「だったらなにもこんな日にわざわざ」

禎 「(辰則に)だから心配してるんじゃないのッ。(と、希

望に)希望さんにも心当たりなの？ 母さん、あん

たにはなんでも話してたんでしょ」

希望 「家出なさらないようなことなんてなんに

も……。私はお母さんの気持を裏切って焼き物なんか

焼いてるもんだから、商売のことはさっぱりだし……。

あんまりいい相談相手にはなれなかったから……。き
っと仕事の上のことではなにか……」

仁 「スーパールのほうはうまくいってるんだ。おふくろに文句言われるようなことはないねッ」

希望「……」

仁 「(道子に) お前がまたなにかおふくろの氣に障るようなことを言ったんじゃないのか」

道子 「また私を悪者になさるんですかッ」

仁 「いつも言ってるだろ、あれでおふくろは結構傷つきやすいんだから」

道子 「冗談じゃありませんよッ。私は、お姑さん^{かあ}には出来る限りの遠慮して……。どんな横車押されてもご無理ごもつともで、腫れ物に触るようになって仕えてきたんですッ。それをそんなッ……。 (と、泣き出す) 」

禎 「道子さん」

道子 「なにかってという私のせいにするけど、私が言ったことくらいでこたえるようなお姑さんですかッ。私のことなんて頭からばかにして、自分の思う通り、したたかに生きてきたひとなんですからねッ。それはあなたが一番よくご存知でしょ。私のほうが情けなくて家出したいくらいだわッ」

懽然とする仁、禎、辰則たち。

道子 「私だけじゃありませんよ。いくらあなたがお母さんお母さんって立てたって、お姑さんにはあなたなんて

不肖の息子なんです。その証拠に血もつながっていない希望さんのほうを、まるでほんとの子のように大事にしていらしたじゃありませんか」

仁の顔色にさっと怒りがひろがる。

禎 「(あわてて道子に) 今そんなこと言ってるときじゃないでしょう」

道子 「いいえ、言わせてもらいますッ。このひとが大事だったら、このひとが今までのすべてを賭けて、今度の店を出そうとしているのを、頭ごなしに反対なさることないでしょう。おまけに、やっと開店に漕ぎつけて、今日はそのおめでたい開店祝って日に、まるでみんなの氣持踏みにじるように、当てつけがましく家出するなんてッ。それが息子大事と思ってる母親のすることですかッ」

仁 「道子ッ」

道子 「ええ、出ていきたくやあどこへでも出ていらっしやればいいんだわッ、これで、私だってせいせいしますッ」

仁、いきなり道子を殴りつける。

びっくりして仁を止める希望。

道子 「殴りたきゃあ、いくらでも殴ったらいいでしょうッ。でも私はお姑さんを許せないッ……。だって、も

し、今度のお店がうまくいかないようなことにでもなったら、あなたの今までの苦勞も水の泡になるのよッ。それだけじゃない、禎さんご夫婦だって、剛だって、田倉の一族みんなが路頭に迷うようなことにもなりかねないんですからねッ。そんな大事な店の開店にケチをつけるような仕打ちなさるなんてッ……」

希望「お母さんはそんなつもりで……」

道子「(希望に) あなたは黙っていてください。希望さんはうちの商売には関係のないひとなんですから」

黙ってしまう希望。

道子「(仁に) 私の言うこと間違ってますかッ!」

慥然としている仁、と、そこへ仁の長男剛(28)

がとびこんでくる。

剛「なにしてるんだよ。さっきから車が待ってるっていうのにッ」

仁「なにかわかったか?」

剛「おばあちゃんなんてほととけよ。いなくったってどうってことはないだろッ」

道子「そうね、お姑さんが出席なさらなくったって、開店できないってわけじゃないんだから。とにかくもう時間……」

辰則「急ぎましょう」

道子「(剛に) 幸子さんは……?」

剛「玄関で待ってます」

仁、出ていきながら、手伝いの娘文子(19)に、

仁「もし大奥さまから連絡があったら、すぐ店のほうへ知らせてくれ」

文子「はい」

道子「(ジロリと仁を睨むと、文子に) じゃ、留守お願いしますよ」

文子「はい」

あたふた出てゆく一同——希望も見送りに立って

ゆく。

同・おしんの部屋

圭がひとりぼつんと座って考えこんでいる——希望がのぞく。

希望「(笑って) なにしてるんだ、こんなところで……」

圭「(ハッと我に返って) ……」

希望「帰るぞ」

圭「うん」

希望「心配ないよ、おばあちゃんにはおばあちゃんの考えがあつてしていることだ」

圭「うん、あのおばあちゃんが自殺なんかするはずない」

もんね」

希望「(笑って) ああ、死ぬ気になったらなんだって出来るって根性の持ち主だ、死ねたって死にゃあしなさ」

圭「誘拐されたんでもないよね、ちゃんと旅行の支度してっただから」

希望「そんなこと考えてたのか」

圭「いや……おばあちゃんの部屋にいと、おばあちゃんの心が見えてくるような気がしてさ」

希望「……見えたか……」

圭「全然……(と、笑い手にした古いこけしを見つめて)

このこけし、おばあちゃんが大事にしてたんだ」

希望「あ、父さんが物心ついたときからあったよ。そのこけし……」

圭「このこけしの話したことある……?」

希望「ない……おばあちゃんは昔を振り返ることが嫌いなひとだった。苦労話も一切口にしなかった。前だけ向いて歩いてきたんだ」

圭「……」

希望「お前になにか話してくれたのか?」

圭「いや……でも……(と、口ごもる)」

その圭を探るように見る希望——そこへ、文子が

のぞく。

文子「お茶いれました。どうぞあちらで……」

希望「もう帰るんだ、気を遣わないでいい」

圭「せっかくなんだ、ご馳走になろうよ。(と、出ていこうとして文子に) 文ちゃんは、なんにも気づかなかった、おばあちゃんのこと……?」

文子「はい、昨夜も寝る前にこちらへご用をうかがいにきたんですけど、いつものようにニコニコなさって、なにもないからって……。別に変わったご様子は……。それが、今朝、いつも朝早い大奥さまがなかなか起きていらっしやらないもんで、変だと思って来てみたら、部屋の中がきれいにかたづいていて……」

圭「……」

文子「最初はお散歩かと思っていたんです。それがいつまでたってもお戻りにならないんで、大騒ぎになっちゃって……。だって今日は特別の日だっていうのに……。でも、ほんとに家出なさったんでしょうか」

圭「さあね。(と、笑い) 案外、今頃ケロッとした顔して開店祝いに出てるかもしれないよ」

文子「そうですねッ。大奥さまはお仕事の鬼って言われているかだもん。(と、笑い) でも、お二人はどうして開店祝いに出席なさらないんですか?」

希望「(笑って) 私たちはスーパーとは縁がないからね」

文子「ご親戚はみなさんお出になるって……八代さんは旦那さまの弟さんじゃありませんか。圭さんだって、大奥さまには大事なお孫さんだし……」

圭「(笑って) あんなもの、招待されたってごめんだね」
あきれたように圭を見つめる文子。

スーパー「たのくら」表

市長がテーブカットをする——そばに控えている

仁、辰則、剛たち。

大勢の客が、開店を待っている。

開店祝賀パーティーの会場

仁が町の有力者たちに挨拶している。

仁「いやあ、こちらへ進出するのは、私の夢でして……」

これで長年の宿願が果たせました。市長並びに地元のみなさまのお力添えのおかげでございます」

男A「初日から大成功でなによりでした。いや、おめでとう」

男B「相当地元の商店街じゃあ反対があったが、無理もないねえ。この盛況じゃ、商店街の客はみなお宅にとられてしまうんだから……」

男C「スーパーの進出は、地域社会に貢献することだよ。

商店街にもいい刺激になる。そう思ったから、地元を説得もし、協力もしたんだからね」

仁「ありがとうございます。極力市民のみなさんのためになるよう、サービスに努めさせていただきます。今後ともよろしくお願い申し上げます」

と、そばにいた辰則や、剛たちを有力者たちに紹介する。

仁「長男の剛でございます。営業部長をいたしております。こちらが女房の幸子でして、(幸子が連れている男の子を見やり) 孫の進……三つになります。(と進に) ご挨拶は……?」

ベコリと頭を下げる進。

男C「立派なご子息とお孫さんに恵まれて、田倉家は万々歳ですな」

仁「いやあ、いつ一人前になってくれますか……。と、笑いい辰則を見て) 妹婿の崎田でございます。総務部長をいたしております」

辰則「なにかとご厄介をおかけすることになると思いますが。よろしくお引き回しのほど、お願いいたします」

仁「(猿を見) 妹でございます」

禎「兄や主人がお世話になりました……」

男A「ご兄弟やご子息が右腕になっておられるとは、心強い限りですな」

男B「今日は、副社長がおみえになってないようだが……」

仁「はい、ちよつと身体をこわしまして」

男C「そりゃあいけませんなあ。なにしろご母堂はご高齢だそうだから……」

男A「女丈夫の噂はかねがねうかがっています。お目にかかるのを楽しみにしていたんだが……」

仁「母にもそろそろ引退してもらって楽をさせてやりませんと……」

N「その頃、おしんは、ひとりで北へ向かって走る列車に乗っていた。どこへ、なにをしにゆくのか……それは、おしんだけしか知らないことである。」

走る列車

その座席に、きちんと正座して窓外を見つめているおしん。

八代家・圭の部屋

圭がぼんやり考えこんでいる。が、いきなり立ち上がると出てゆく。

同・希望の仕事場

無心にロクロを回している希望。ふと顔を上げる——圭が立っている。

ロクロの手を止めて圭を見つめる希望。

圭「金……くれないかな」

希望「……」

圭「十万ほど……」

希望「……」

圭「ちよつと旅してきたいんだ」

希望「……」

圭「しばらく帰らなくても、心配しないでもいいよ」

また黙ってロクロを回し出す希望。——じつといつまでも立っている圭。

N「突然の圭の申し出に、希望は息子の真意をはかりかねていた。が、圭が理由もなくそんなことを言い出すはずのないことも、父親は知っていた。」

またロクロを回す手を止めると、気に入らないらしく出来上がりかけていた土をつぶしてしまう希望。

圭「ごめん、邪魔して……」

希望「しょうのない奴だ。（と、苦笑する）」

希望を見つめる圭——父と子の心がふと通い合っ